

木下利玄(一)

——習作期の感性——

はじめに

木下利玄は、明治十九年一月一日岡山県賀陽郡（現在では岡山市）足守町に、足守藩主木下利恭の弟・利永の次男として生まれた。木下家は足守付近を領する二万五千石の小大名であったが、初代の羽柴中納言家定が豊臣秀吉の正室・北政所の兄であり、岡山藩の池田家と互角に並ぶ格式の高い家柄であった。明治二十三年三月、木下家十二代目の足守藩主利恭が死去した時、彼には跡嗣の子供がなく、一門の会議の結果、利玄が養嗣子に迎えられ、ることになったのである。

利玄は、養嗣子の決定がなされた後、生地足守を離れ上京しなければならなくなるのであるが、それは明治二十三年十一月のことであり、利玄がまだ五歳にも満たない幼少時のことである。東京における利玄の生活は、旧国家老で県会議員をしていた木下岡次郎の厳重な監視と容赦のない叱責に拘束された規律正しいものであった。先代の近習二階堂左馬七の内証の庇護に僅かな慰安を

吉田俊彦

得ていたが、実母やすの死に際しても帰郷が許されず、重い拘束力に縛られていたこの東京での生活は、幼少時の利玄にとって、決して安息の場とはなり得なかったのである。「反抗的な心を持ちつつ」「少年の悲哀といふやうなものをしみじみ感」（『道』）じ、そして、その「特殊な孤児のやうな境涯」（同）の寂寥に驅られるように求めたと言われる習作期の歌には、格式高い良家の秩序に喘ぐ利玄の、人間的悲哀と詩的感性の原型を探し当てることができるとはなからうか。

一 習作の風景原像と生活背景

注(1)

利玄が佐佐木信綱の竹柏園に入門したのは明治三十二年十月十七日である。まだ十三歳の少年である利玄がどれほど明確に自己の内的モチーフを認識化し得ていたか、彼自身の回想的言辞のみによって判断することには問題もあるが、習作期の歌に表われているいくつかの特徴を併せ考える時、かなり正確なものが見えてくる。

まず第一は、「特殊な孤児のやうな境涯」にある自己認識と感傷的自己憐憫である。

△人訪はぬ深山のおくのもみち葉はおのが姿をひとりめづらん△

利玄は「道」の中で「当時の自分の詠草は実に幼稚なものです、今覚えて一首を抜いて見ます」という前置きのもとに右の歌を紹介している。もっとも、五島茂氏によると、^{注2}これは大正十一年病中の利玄が照子夫人に口述筆記させて、それを第二歌集「紅玉」出版の玄文社が発行する婦人雑誌『新家庭』九月号に発表した」もので、「まったく利玄の記憶ちがいの口述だった」のであり、実際の詠草は次のとおりである。

△人間はぬ深山の奥にさく菊は己が姿を独りめづらん△

「人間はぬ」は、語法上より見て、「人訪はぬ」に改められるのが適切であることは言うまでもあるまい。また、「深山の奥にさく菊」が「深山の奥のもみち葉」に改められることも当然の成行きと考えられる。人々の心を誘う秋の山の自然の特徴は紅葉の美しさであり、「深山のおくのもみち葉」は山を「訪ふ」人の一般的心情の動きの中で、自然に思ひ浮ぶイメージと言えるからである。このように、「人訪はぬ」という第一句と緊密に連鎖していく句は、「深山の奥にさく菊」よりも「深山の奥のもみち葉」であるにもかかわらず、利玄がこの連鎖性を無視して「白菊」を詠み込んだのは、題詠と未熟な技倆に伴う古歌の影響とに拘束さ

してゐる時、利玄固有の形象モチーフは明瞭に見えてくる。

△わが宿の庭のしら菊咲きにけり荒き雨風心して吹け△

この歌は庭に咲く清楚で優雅な白菊の運命を優しく気遣う気持を素直に詠んだ歌であるが、師の佐佐木信綱は下句を「友よびつどへ共にながめむ」と訂正している。五島茂氏は^{注3}「下句が古歌の△荒き波風心して吹け△の模倣であるからであろう」「添削されているのは当然であろう」とされている。しかし、利玄の孤独な生活背景を考えると、「荒き雨風心して吹け」という言葉には、選択されたそれなりの必然的重みを読みとることができる。

△その頃家は、四谷坂町幼年学校の前にあつたが、四谷の家は私の家とKOの家とNSの家と三軒に分かれてゐて、その間に運動場といつてブランコと鉄棒を拵へている場所がありました。夕方など、そこへ出て遊んでゐるうちに日が暮れて士官学校の山の木立に風が鳴り、稽古に吹く兵隊のラッパが、星の見え初めた空に響渡るのを聞きながら、非常に感傷的な気持になつてゐた事を、今でもはつきり思ひ出す事が出来ます。さういふ時に、KOの子供やNSの子供はそれぞれ邸内にあつた父母のゐる家へ帰つてゆきましたが、私は女中下男ばかりの索漠たる家へ帰るのです。私は陰鬱な思ふ事も快活に云へない少年として育ちつゝありました。△(傍点引用者)

れたためと考えられるが、この歌と同時に詠まれた次の歌と対比

に鳴る風の音とかラッパの響きを聞きながら浸る「感傷的な気持」の中で、「女中下男ばかりの索漠たる」自分の家のことと思う少年利玄の哀しみが鮮やかに描き出されている。「思ふ事も快活に云へない」少年利玄にとって、庭に慎ましく咲く清楚で優雅な白菊の花は、感傷的な思いの中で浸るナルシシズムによって、無意識のうちに同一化してゆく美的対象であったと言つてよからう。

このような少年期の感傷的なナルシシズムによって白菊と同一化している利玄の心情に注目する時、「荒き雨風心して吹け」という下句には、「女中下男ばかりの索漠たる家」の中で「陰鬱な」思いに沈みがちな自分自身の姿を慈しみ憐れむ利玄の哀しみが現れてくるのである。「人間はぬ深山の奥にさく菊は己が姿を独りめづらん」という歌は、「わが宿の庭」が「人間はぬ深山の奥」に詠みかえられたことによって、遠く故郷を離れ、さらにまた、両親とも別れて生活する自分の孤独な生活心情をモチーフにした形象性が一層明瞭なものになっている。「己が姿をひとりめづらん」という下句には、「父母のある家」を持たない「索漠たる」生活状況に置かれながらも、世俗に汚されない孤高の生活美学に自己確証を求めようとする利玄の、悲しくも痛ましい決意を読みとることもできよう。

第二は、感傷的夢想と転変衰微の変化相への詠嘆である。

△をさなどち鬼あそびせし産土の絵馬堂くつれ草おひにけり
道のべに敷かるゝ石もみ仏の像彫れる石もある世なりけり

これは回想文『道』の一節である。ここには、夕方の木立の枝

見渡しの殊によりかりし山の上は外国びとの家ぞたちける▽

（竹柏園集第一編『折にふれて』）

△友とわれ草花つみし野はなくて鍛冶屋居酒屋町となりけり▽

（竹柏園集第二編『帰省』）

△幼なとちおに遊せしうふすなの絵馬堂くつれ草生にけり

道のへにしかるゝ石もみほとけの像彫れる石もある世也けり▽

（学習院輔仁会雑誌五十四号）

右の歌の中、明確に故郷の風景を詠んだ歌と言えるものは、「をさなどち……」と「友とわれ……」の二首である。しかし、この歌も、故郷の具体的な風景からの感動を支えにしたものと言ふことはできない。

△（略）私は故郷を立出づる事になりました。此以後、私は父母の膝下に暮すといふ事はもうありませんでした。父は其後、私の小学校時代に一度上京し、又私も十八歳の時一度と廿歳（明治卅八年）の春と廿一歳（明治卅九年）の春に父の病氣を見舞ふ為帰省しましたが、それは極く短かい時日の如何にも慌しいものでした。父は私の此三度目の帰省中、亡くなったのです。又母には五歳の時から逢ふ機会はありませんでした。母は私の七歳の時、故郷で亡くなつて了りましたから。▽

（『道』傍点引用者）

右の文章から明らかなように、利玄が上京後初めて帰郷したのは明治三十六年であるので、明治三十四年二月発行の竹柏園集第

一編をはじめ、明治三十四年四月発行の学習院輔仁会雑誌五十四号並びに明治三十五年五月発行の竹柏園集第二編に発表された故郷の歌は、利玄の帰省より前のものである。つまり、故郷の具体的な風景からの感動とは無縁な、感傷的夢想の産物という外はない。発想の特徴としては、中世の時代的生活感情に根を持つ無常観を身に体し、紋切型に行う転変衰微の変化相への詠嘆を挙げることができる。

《ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世中にある、人と栖と、またかくのごとし。》

（『方丈記』）

《夏草や兵どもが夢の跡》（『奥の細道』）

《春高樓の花の宴／めぐる盃影さして／千代の松が枝わけいでし／昔の光いまいづこ》（土井晩翠『荒城の月』）

これらの詩文に生きた時間的経過の廣す変化相への詠嘆は、特定の時代を超えて日常的生活感情の中に生きているものとも言えるが、しかし、このような伝統的枠組の中で感傷的抒情を行う限り、利玄は自己の生活感情を支えとした固有の風景を発見することはできないのである。

第三は、暗影に沈む隠微な世界への接近である。

《わが父に迎へられしは夢にくらきみなとに舟はてにけり》
この歌は、明治三十四年二月発行の竹柏園集第一編と明治三十

四年四月発行の学習院輔仁会雑誌五十四号の両誌に掲載されたものである。すでに、武川忠一氏の指摘にも見られるように、これは、利玄が学習院の寄宿生活に入ってから後の作品であるにもかかわらず、注⑤「やはりどうしようもない孤独な暗さ」が滲み出ているのである。厳酷な監視と容赦のない叱責の下で、反抗的な気持を抱きながらも自制的に生活する利玄は、様々な浪漫的夢を胸中に大きく膨ませていたものと考えられるが、母の死にも立ち会うことができず、また、帰郷も思いのままにならない利玄にとって、「わが父に迎へられ」ることは抑えがたい大きな夢の一つであったと言えよう。

ところで、この歌の素材的背景は、竹柏園集第二編に掲載されている『旅の歌の中に』の冒頭の歌を対応させてみる時、より具体的に見えてくる。

《汽笛の声やみにひびきて燈火のすくなき村に舟はてにけり》
『旅の歌の中に』という表題が示すように、この歌は旅の生活の中から生まれたものである。この歌と「わが父に……」の歌を重ね合わせてみる時、「わが父に……」の歌の解釈は次のようになっている。利玄は船旅をしていた時、疲労のためについ眠りに落ち、そして、その眠りの中で帰郷の夢を見ていたのである。五歳で上京した利玄は二年後の七歳の時母を喪ったが、何故かその際帰郷をしておらず、また、父の上京も初等科時代に一度のみで、母死亡後の利玄にとって、父との再会は大きな夢であったと考え

られる。夢の中でめでたく父に迎えられた利玄は、父の「血」の温もりに触れながら、東京での「特殊な孤児のやうな境涯」の寂しさを払い去ることができたのである。ところが、鳴り響く汽笛の音に眠りから覚されてふと目を開くと、折しも、船は闇に包まれた見知らぬ「燈火のすくない村の湊」に停泊したところであり、夢は儚く潰え去ったのである。幸せに充足した明るい夢とそれが消滅した沈鬱な現実との対照性は、時間的経過の驚く転変衰微の変化相とは異質のものであり、どこまでも利玄固有の生活の哀しみに支えられた抒情と言つてよからう。素材的にこの歌と表裏をなしているのが次の歌である。

《今日つくときゝにし子らの舟つかずみなとの夜風あれまさりゆく》(学習院輔仁会雑誌五十四号)

「わが父に……」の歌が父親と再会する夢の破れた子供の悲哀を詠んだものであるのに対し、右の歌は、再会の予定時を過ぎても到着しない子供の無事を気遣う親の憂慮を詠んだものである。

以上の三首の歌に共通するものとしては重い「暗影」を挙げることができる。「くらきみなと」「やみ」「燈火のすくない村」、そして、「夜風」……、これらの「暗影」に沈む隠微な世界を凝視する利玄の念頭には、不吉な運命とでも言えるような、ある無気味な力への怖れが強く働いていたと言えるのではなからうか。

二 帰郷体験と新たな風景の獲得

△水遊して魚をすくひ、蛸狩せし小川は水あせて魚もすまず。
山寺にまうで、母君の御墓を拝む、標の石たちて、小さきしきみ植ゑたり、あはれ母君は、いにし年余が都へ上る時には、御病もまだ軽くて、門まで見送り給ひしを、今は春の花、秋の月もよそに眠り給ふよと、思ひいで、涙にむせぶ。△ふるさとの夕日の影にてらされて、われは恋しきなつかしき故郷を去りて、又都の塵に入らんとす、我は俄にかなしくなりて、街道の松かげに憩ひて、乗合馬車を待ちぬ、▽(傍線引用者)

これは明治三十五年三月学習院輔仁会雑誌五十七号に発表された『我が故郷』の一節である。利玄が上京後初めて帰郷したのは明治三十六年であるので、この文章は故郷の具体的な風景からの感動を支えにしたものと言ふことはできない。傍線部(一)において、昔日の面影を残さぬ「小川」と「母」の様子を描く利玄の感性は、時間的経過の驚く変化相への詠嘆と懐古的な感傷に包まれたものである。傍線部(二)の「夕日の影」を背景とした心情描出部にも、衰微するものの持つ寂寥と悲哀を紋切型に取り込む感傷的詩情が強く働いていると言つてよからう。歌人利玄が大きく成長するためには、このような紋切型の感傷と詩情をまず払拭しなければならなかつたはずである。

利玄が自己の風景を獲得してゆく第一の契機は、治者的視角を

開く帰郷体験である。

《遠つみおや治めましけむ吉備の国中つ国原麦秀でたり》

これは上京後初めて帰京した際の歌である。この歌には、時間的経過の驚く変化相への詠嘆とか懐古的な感傷詩情を読み取ることはできない。見渡す限りの田圃には、豊饒を約束する麦が生々と成育し広がっているのであるが、この主題の対象である「秀でた」る麦田の広がりをも、「遠つみおや治めましけむ吉備の国中つ国原」という枠づけのもとに捉える利玄は、木下家の誇り高い藩主の血を自己の体内に感知するとともに、領有範囲の統治秩序があるがままに見定める治者の認識視角を無意識のうちに開いていたものと考えられる。明治四十四年十一月「白樺」に発表された『山遊び』には、紋切型の感傷的詩情を捨て、この認識視角を開いた利玄の新たな感性を読みとることができる。

《目を放つと見渡す限りの平野は田圃で、田圃は悉く黄色な稻である。田圃を限るのは山である。岡山の方の山、鬼の釜のある新山、町からは宮地山の蔭になつて見えない後の高い山がすつきり表れて、その又後の山々に連つてゐる。山又山の向うの方が山陰道になる。田圃の中に足守の町の屋根が見える。整然とした町並である。小学校の広い運動場が見える。地面が白く光つてゐる。うねくと流れる足守川が見える。上り列車が足守へ着くが見える。さうしてひろくとすべて是等のものが、^(四)限もないほがらかな日光につつまれて喜んで居るのが驚く許り

大きく美しく打見られる。》(傍線引用者)

「平野」の広がりを「山脈」による限定と「稻」による彩色をもつて捉えている傍線部(一)の故郷の風景は、『我が故郷』の風景とは全く異質のものと言わなければならない。この『山遊び』の風景は堅牢な輪郭と鮮明な表情を持ったものである。「平野」と「山」の細部描写を行う傍線部(二)(三)にも、同質の輪郭と表情が探し当てられている。これは、主観的情意を挿まず、自然の秩序体系を凝視する写実的姿勢への開眼を示すものと言えるが、これと同時に、表情を表わす「黄色」と「白」の鮮明な色彩には、「ほがらかな日光につつまれ」た自然の生命(傍線部(四))に感嘆する利玄の浪漫的心情を見落してはなるまい。このように、自然的秩序体系への凝視と浪漫的心情への傾斜とに揺れ動きながら、自己の風景を探り当てようとする認識視角は、習作期の歌の中にも見出すことができる。

《た、一木高くたちたる野つかさの松をしおりて野分ふくなり》

この歌は、明治三十四年四月学習院輔仁会雑誌五十四号に、『野分』と題して発表された二首のうちの一首である。この歌の発想的特徴は、すでに見てきた「人訪はぬ……」の歌と共通するものがあり、主題対象との無意識の同一化が行われていると見ることが出来る。「野分」にしかれる「松」の姿には、「特殊な孤児のやうな境涯」に沈む自己の姿が重ね合わされているのであり、透徹した自然観照の歌にはまだ程遠いと言わなければならない。し

かし、空に向って高く伸びるこの樹木への凝視には、長い年月を経て次のような歌を生み出す素地が築かれていたと言えよう。

《向つ峰の空にくひ入る杉の木がちつところへて尖りゐるかも》
(大正四年)

利玄は『道』の中で、「ちつところへる以下は云はなくても充分だ」と評した島木赤彦の意見に首肯する自分の感想を「物象に喰ひ入らうと熱心になりすぎてゐて、是でもか是でもかといふ処が見え、騒々しくなつてゐる」と纏めてゐるが、透徹した自然觀照の眼は、習作期の感傷的抒情のもとでも徐々に育て上げられていたのである。

《あらかりし風は収まり雨はやみていその松ばら月ぞきらめく》

(竹柏園集第一編)

これは時間的経過の齎す変化相を粹組としながらも、紋切型の回想的ロマンチズムを脱した歌の一つである。この歌の主題対象である「いその松ばら月ぞきらめく」という清澄優雅な現在相の美は、「あらかりし風」と「雨」という暗い荒天の過去相とそれを払い去る状況変化に支えられて、その印象を鮮明なものにしている。このように、経過する時間軸の上で、新たに開けてくる印象的な現在相を浮び上がらせる歌は、学習院輔仁会雑誌五十四号の中にも見出すことができる。

《あらかりし野分の風はおさまりのべのいしふみ夕日さすなり》
利玄が自己の風景を獲得してゆく第二の契機は、人間の複雑な

生活心情の交錯に着目するモチーフの形成である。

《(略)それから薄黒い人影が往つたり来たりする、ふと左を見るとすぐそばの人力車停車場に人力車が一台客を待つて居る処へ大久保の方から雨傘をさして和服の人が通りかゝつたのを見て、「参りませうか旦那」／旦那は止つた車夫は傍へ行つた何か話したが聞えない談判不調だつたと見え旦那はさつさと行く車夫はあとから「もう二銭おやんなさい」と云ふ旦那はだまつてずん／行く車夫はとう／降参して「参りませう御待ちなさい」／と云つて車をひいてかけてくる旦那は頼にさわつたと見え稍鋭い声で「それだから貴様達はいかんと云ふのだ己がいくらと云つたらハイと云つてくればいいんだ一銭や二銭ふやしてくれなんて云ふもんじやないんだ」／旦那御一石なこれは車ひきのもち前で御座いますさう御腹を御立てになつちやエへ……これはもう下人の」／「駄目だよ貴様それがやつぱしいかんのだ」／など旦那はブー／こぼして居るその中に車夫は毛布や桐油を前へ掛けて引き出していつてしまった、僕はこのダイアログがあまり可笑しかつたので思はずふき出した》(傍線引用者)

これは明治三十七年七月学習院輔仁会雑誌六十二号に発表された『蛇の目傘』の中の『雨の夕ぐれ』という小表題を持つ文章の一節である。陰湿な感傷性を極力抑えながら、複雑な生活心情が注意深く捉えられている。傍線部(一)は車夫の客引き交渉の成立場

面であり、傍線部(二)からは損得計算をする旦那と車夫の掛引き場面である。利玄は、傍線部(二)において、「さつさと行く」旦那に「もう二銭おやんなさい」と声を掛ける車夫を設定することによって、具体的な生活背景を持った人間心理の複雑な葛藤劇を成立させることができたのである。「もう二銭おやんなさい」という車夫の言葉は、意地汚い欲得として処理することはできない。貧困な生活に少しなりとも補いをつけようとする切実な欲求に駆り立てられた言葉である。傍線部(三)において、「とうく降参して」しもう車夫の気持は悲痛という外はあるまい。

ところが、一方の旦那はこうした車夫の苦衷など寸分も理解し得ないのである。降参した車夫に対し、「鋭い声で」「それだから貴様達はいかんと云ふのだ己がいくらと云つたらハイと云つてくればいゝんだ」と極めつけ、さらに、「一銭や二銭ふやしてくれなんて云ふもんじやないんだ」と言ひ被せる傍線部(四)の旦那は、有産階級の傲慢な生活意識をもろに現わし、車夫を「下人」として徹底的に見下していると言わなければならない。旦那のこの傲慢な言辭を、「これはもう下人の」という卑屈な謝辞で容認する車夫の応対姿勢には、不合理な封建的身分差別と聞いきれない弱者の哀しい生活の知恵を見出すことができる。傍線部(六)の旦那の言辭には、有産階級の傲慢な自尊心と観念的な人倫主義の混在する奇妙な不満が覗いているが、哀しい生活の知恵に生きる車夫にとっては、この旦那の言辭も不満も何一つ意味を持つものではない。

ない。旦那が不満な言辭を並べるうちに、「毛布や桐油を前へ掛けて引き出」す傍線部(七)の車夫の姿には、「雨の夕ぐれ」の情緒と照応する哀感が深い余情として浮び出ている。

利玄は、傍線部(八)において、語り手「僕」に「このダイアログがあまり可笑しかったので思はずふき出」させているが、具体的な生活背景を持った複雑な人間心理の起伏を鮮明鋭利に描ききっており、この透徹した観察眼と深い余情的表現は、そのまま、利玄独自の風景を獲得してゆく重要な力になっていたものと言つてよからう。

《やむ人はしばし眠りてみとり女の毛糸あむ夜を秋の雨ふる》

(明治三十五年)

《庭鳥の声のみ道の霜に冴えて人いまだ起きず山かげの村》

(明治三十七年)

《ぐぐり戸の障子の明りところど時雨さびしき宵の町かな》

(明治三十八年)

さりげない日常的生活風景の奥行きを見定めようとする認識的素地は、これらの歌の中にも認められるものであるが、利玄は、『雨の夕ぐれ』によって、さらに、劇的魅力を生み出す^{注⑤}仮構的形象視点を獲得することができたのであり、秀作『お京』とか物語的発想より成る歌の形象起点は、この『雨の夕ぐれ』の中に見出すことができるのではなからうか。

《母は子に思ひ絶えよとさとしけり其の夜の月は二人照らしぬ

恋ゆゑに人をあやめしたをや女の墓ある寺の紅梅の花▽(『銀』)

む す び

△うす雪は小雨にとけてうぐひすのさくなきさむき敷かげの道▽

(『銀』)

これは大正三年五月浴陽堂より出版された第一歌集『銀』の巻頭歌である。『銀』は、北原白秋の『桐の花』の影響を受けた

「官能的な」「新しがり」(『道』)の作品とか、「空想歌集を統」(同)んで転身を図る写实的歌風の作品などが収められている習作期の歌集であるが、右の「うす雪は……」の歌が迎想を喚ぶ先人の作品としては、金子薫園の『片われ月』(明治三十四年一月)の巻頭歌を挙げることができる。

△あけがたのそぞろありきにうぐひすの初音ききたり敷かげの道▽

注⑩

「写实的立場を唱へ、△明星▽の△浅薄なる思想▽△卑近なる希望▽△下劣の情▽△猥雑の愛▽を排撃し」ながらも、「伝統的

花鳥風月の詠風」を「残しながら」「温藉典雅、浪漫的な微香と

清新な調べ」に特徴を見せたと言われるこの薫園の歌は、白秋、

空想、晶子とともに、青年利玄の歌心に強い影響を与えたものと

考えられる。次の歌にも共通の要素は容易に見出すことができる。

△吾妹子と後れさきだち梅かをる町をさまよひぬおぼろ夜の月▽

(薫園)

△いもうとの小さき歩みいそがせて千代紙かひに行く月夜かな▽

(利玄)

このように、「うす雪は……」の歌には、薫園の影響を見落すことはできないのであるが、感傷的夢想とか転変衰微への詠嘆、あるいは、幽微な世界に潜む無気味な力への怖れなどを払拭し、そして、自然的秩序体系への凝視と甘美な浪漫的心情のもとに捉えたこの作品の風景には、習作期における利玄の、自負に満ちた独自の風景が美しく開かれていると言えるのではなからうか。

注

(1) 五島茂氏は、木下味子夫人(利玄嗣子亡き利福夫人)の尽力によって発見された利玄の日記をもとに確定されている。

(2) 『鑑賞 木下利玄の秀歌』(昭和六十一年十一月、短歌新聞社)

聞社)

(3) (2)に同じ。

(4) 明治三十三年六月、学習院輔仁雜誌五十二号に発表された『落花に対して感を述ぶ』は、「花は盛の時のみかは。風に散り行く風情も中々にあはれるものなり」という書き出しで始められている短文であるが、この言葉には、『徒然草』の第三百三十七段「花はさかりに、月はいくまなきをのみ見るものかは」の影響が明確に表われている。

(5) 『利玄短歌の推移と本質』(昭和六十一年八月、『短歌』、角川書店)

(6) 川田順氏は、「此歌、結句^{マユ}秀^ユでたりは、小封と云へども

国柄の豊かなるさま、遡つては父祖の治績の良かつた事さへ言外に響いて、まことによく利いてゐる」と評しておられる。

(『利玄と憲吉』八昭和十一年三月、岩波書店V)

(7) 利玄自身は、「少年時代から人事の入り込みや諸相よりも自然や草木などの方に多くの興味をひかれた。この傾向が自分を今日の如き短歌制作家にさせたものと思つてゐる」(『自分の傾向』)と述べている。また、紅野敏郎氏の『日露戦争と木下利玄(上)——新資料「木下利玄日記」を読む——』によると、利玄の日記は志賀直哉のものとは異なり、「必ずといってよいほど」「気候や景色に対しての記事」があり、「それへの反応がまさに日常化している」のである。この特徴には、歌人利玄の感性が作用していると言つてよからう。

(8) 志賀直哉は、『春の旅を憶ふ』の中で、「小説を書く事が流行し、仲間の誰もがさう傾いて居、歌の方の仲間は一人もないし、その上、誰れよりも先に左ういふ出来上つたものを作れた木下がどうして其儘散文作家として小説家にならなかつたか、少くとも左ういふ誘惑を受けなかつたか、一寸不思議な気がする」と述べ、利玄の散文作家としての資質を認めている。

(9) 武者小路実篤は、『白樺を出すまで』の中で、「皆、自分のかいたものを朗読した。僕は三幕か二幕の現代物をもつて行つた。三人とも落第で、木下のだけ評判がよかつた。『お京』

と云ふのだつた」と回想している。

(10) 久松潜一編『日本文学史 近代』(昭和三十七年九月、至文堂)

(11) 『日本近代文学大事典』(昭和五十三年一月、講談社)

(12) 川田順氏の『利玄と憲吉』(昭和十一年三月、岩波書店)の中に、「『みだれ髪』『舞姫』の作者と謝野晶子女子華やかなりし頃なので、利玄も亦その方へ、一寸おとなしい眼を俯目勝ちに向けて見た」という指摘がある。

(13) 新聞進一氏は、蕨園の「あけがたの……」の歌の類歌として、利玄の「うす雪の……」の歌を挙げておられる。(『鑑賞と研究 現代日本文学講座 短歌・俳句』八昭和三十七年八月、三省堂)

(岡山県立短期大学助教役)

研究室受贈図書雑誌目録 (二)

学大国文(大阪教育大学) 第三十号

香椎鴻(福岡女子大学) 第三十二号、第三十三号

活水日文(活水学院) 第十五号、第十六号

活水論文集 第三十集

金沢大学教養部論集 人文科学編 24ノ2

金沢大学語学文学研究 第十六号